

## 横尾忠則 <sup>かんざんひやくとく</sup> 寒山百得展と <sup>かんざんじつとく</sup> 寒山拾得図—伝説の風狂僧への憧れ

東京国立博物館 表慶館（上野公園）23. 09. 12～12. 03 拾得図は～11. 05



「横尾忠則」（1936～）は、日本の美術家、グラフィックデザイナー、版画家、作家の肩書を持つマルチタレントとして活躍中である。

本展のテーマは、中国・唐の時代の高い教養を持ち、詩の名作を数多く残した「寒山（かんざん）」と「拾得（じつとく）」という二人の高僧を独自の視点でカラフルに描いた「寒山拾得完全シリーズの新作102点」の公開である。

二人の詩僧は、その奇行ぶりから「風狂」と捉えられ、日本と中国では伝統的な画題となり《寒山拾得》は百面相のように、様々な問を投げかけている。



同時開催の「寒山拾得図」では、箒や経典を手に不気味な笑みを浮かべる二人が洞窟に住んで残飯を食べるといった奇行ぶりが「風狂」とされて、禅僧たちの間では好まれた。画伯が描くこの作品はバリエーションが豊で、古来、子供のように遊び回る人物として描かれてきた「寒山拾得」だが、その姿勢は思うままに筆を走らせてきた作者の創作態度にも通じる。世俗や因習から離れ自由になること、心の向くまま遊ぶように暮らすこと。その中から悟りが開けるのかもしれないと思わせる。

横尾画伯がおおよそ2年で102点を描き上げた作品は、画面に「FUSION」「COSMOS」などの文字が書き込まれること、画風も「ジョルジョ・デ・キリコ」のようなものから、「久隅守景」の《納涼図屏風》やマネの《草上の昼食》の引用、と山水画の山の稜線が二人の身体になったものまでと幅広い。